

男女間の議論に関する研究

—日米語対照研究—

異文化コミュニケーションゼミナール 1216125 土持 勇二

1. 研究動機・研究目的

今日、日本においても異文化理解の必要性が求められている。さらに、2020年の東京オリンピック開催に伴い、世界中から様々な人々が集まることになり、さらなる異文化理解を行動や態度に取り込む必要がある。関係者だけでなく、一般市民の方に対しても理解が必要になる。また、日本を訪れる外国人が増加し、ここでも異文化理解が必要になる。そこで、本研究を進めていく中で、少しでも異文化理解を深め考察したいと考えた。本研究を進めていくにあたり、関連の深い異文化コミュニケーション、非言語表現について先行研究を検討する。先行研究の検討を踏まえ、男女間における議論についての言語面、非言語面に焦点を当てた。そのため、発話の内容、主語などの事項に分けて分析・比較していった。さらに、非言語表現についても検討した。分析結果をもとに、日米語での類似点・相違点などを考察し、そこから考えられる日米間の男女における議論の違いについて類似点・相違点を明らかにした。

2. 研究方法

本研究では、恋愛を題材とした日本と米国の映画を用いた。映画は、2010年以降に制作された恋愛映画の中から、恋人同士の浮気発覚後における議論が含まれる作品を選び、分析した。具体的には、恋人の浮気が発覚した後の会話の言語表現と、会話の前後に見られる行動の種類や表情といった非言語表現の種類と頻度も同時に観察し、分析した。本研究では、日米語の男女間の議論について題材とした映画における相手に対する発話とその前後に見られる行動を分析対象とした。言語表現の定義は、相手に対して否定を汲み取れる表現とし、各国の特徴や、共通点を分析した。非言語表現の定義は、会話の前後に見られる行動の中で、相手に対して行った行動とし、日米語それぞれの映画において、相手に対して行った非言語表現の種類や使用回数を分析し、比較した。上記の方法で得られたデータを、以下の基準で分類し、分析を行った。

3. 主な結果と考察

本研究における分析対象の映画の総時間数は、日本映画は602分、米語映画は450分である。議論表現を含む発話数は、日本語が94回、米語が162回となり総時間数の短い米語映画のほうが多かった。本研究において、日本語の映画における議論表現を含む発話数が最も少ない作品は、『アオハライド』の10回、最も多い作品は『ピースオブケイク』の32回であった。一方米語の議論表現を含む発話数が最も少なかった作品は『Love& Other Drugs』の16回、最も多い作品は『50回目のファーストキス』の48回であった。日米語の映画における議論表現を含む発話の頻度について、発話者の性別で分類した結果を示した。日本の

映画は 61%が男性、39%が女性によって行われ、米語の映画では 54%が男性、46%が女性によって行われていた。日本映画の場合、男女の差は 22%で、男性の発話数が女性の発話数の約 1.5 倍となった。米国映画の場合、男女の差は 8%で米語において著しい差は見られなかった。日本の映画で用いられた非言語表現の回数の合計は 24 回、英語の映画で用いられた非言語表現の回数は 149 回、30 分あたりの議論表現の使用頻度は、日本語が 1.2 回、米語が 8.1 回であった。米語映画のほうが日本語映画においても使用頻度が顕著に多かった。

4. 結論

本研究では、日本語と米語の映画各 5 本中における議論表現の使用頻度を、言語と非言語に分類し比較した。

30 分当たりの議論表現の使用頻度は、日本語が 4.7 回、米語が 10.8 回であった。米語映画の方は使用頻度が顕著に多かった。日本の場合、自己主張は少なく、感情を表現する機会が少ないのが観察され、直接相手を批判する表現を伝える習慣がないことが示された。一方米国の場合、感情的な表現を直接相手に伝える習慣があり、いつも本音の会話をしている人が多いことが示された。議論表現を含む発話数の差には、上記の日米の文化の差違が大きく影響していると考えられた。

5. 卒業論文の執筆を終えて

私は順天堂大学スポーツ健康科学部スポーツ科学科に入学し、体育教員を目指していく中で、異文化コミュニケーションゼミナールを選択したのは、就職したのちに世界的に活躍できる人材になりたいと思っていたからである。しかし、学習に対して意欲的ではないのが私の弱みである。そんな私を快く迎え入れてくださった須藤路子教授をはじめとし、ゼミナールの同期にも恵まれた。

須藤路子教授には多くのご迷惑をおかけすることがありましたが、最後まで私のこと考えてくださり、心から異文化コミュニケーションゼミナールに参加してよかったと感じると同時に、退院後にもかかわらず何一つ変わらない態度で私と接してくれた同期のおかげもあり、ゼミナールの活動を前向きに取り組むことができた。本当にありがとう。

ここでの経験を、今後のキャリアにつながるようにしていき、いつか違った形で須藤路子教授に恩返しをしていきたい。